

## 西田 佳弘君へ

阿部 寛史

高校2年になった私は、模型班をまとめる立場に就かせてもらっている。

下級生の面倒をみながら、自分の仕事をこなすのは大変だが、それでもやりがいを感じている。しかし、ふっとした時、もうここにはいない親友のことを考えてしまう。もし彼がここにいてくれたら……と、思ってしまう。

その親友は西田という。彼は身長がとても高く 180cm を越していた。性格もあまり物怖じせず、ずばずば言うほうだった。その彼は今年の3月、この世から旅立って行ってしまった。鉄研に入部したころから仲が良く、当たり前のように私の隣に彼はいた。中一の時は、一緒に鉄道模型で遊んだり、どちらがより上手くジオラマの建物を作れるか競ったり、お互いに好きな車両を語り合ったりした。中二のとき鉄研旅行で北陸に行った時、今まで鉄研旅行に参加しなかった西田が乗りたい鉄道があるということで参加し、私は一緒に行動班を組んでついて行った。富山地方鉄道と全国の路面電車が好きだった彼は、自由行動で北陸のそれらの路線を乗る行程を組んだ。彼が鉄研旅行に参加したのは、後にも先にもこの時だけだったが、私にとってこの旅行は一生忘れることができないくらい充実した旅行だった。中二の冬、西田が入院した。彼は入院する前、腰が痛いによく口にしていたが、このときの彼は、彼は大丈夫だ、といつものように笑っていたために私はあまり入院を深く考えなかった。半年ほど入院したために体力が落ちていた彼は、退院してからしばらくして学校に来られるようになって長い時間はいられなかった。しかし、それでもへこたれず学校に来るのを楽しみにしているのが印象に残った。

西田は他人にあまり自分のことは話さなかった。私は彼が言いたくなるまで病状のことなどは聞かないようにしようと思心に決め、逆に彼が楽しめる話題を話していた。そんな彼が初めて私に対し、弱音を吐いたのは退院してからしばらくしてがんが転移したのが発覚し、再入院が決定したときである。病状を話すときですら何事もないように話していた彼が、この時ばかりは、沈んだ声でもう入院したくないと呟いていた。いつも気丈にふるまっていた彼がそんな弱音をこぼすほど追い詰められていたと思うとそれに対してただ言葉で慰めるだけしかできなかった自分の無力感に打ちひしがれた。

彼が入院してからは月一の外泊日に仲がいい4人で西田の家に見舞いに行っていた。さらには入院生活がつまらないと週末は電話で1時間以上も話していた。最後まで病気を治し、部活に復帰しようとして頑張っていた彼からもらったものはあまりにも多く、かけがえのないものだった。

彼が生きて過ごしてこれなかった将来を、彼の分までしっかりと生きていきたい。そして、私が年老いて彼のもとに行った時は、また時間を忘れていつまでも鉄道の共通の趣味で話に花を咲かせたい。